

親切な雇い主の譬え

—イエスの言葉の真正性についての一考察—

内田 和彦

初めに

「親切な雇い主の譬え」(マタイ二〇章一—一六節)は、「このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです」という言葉で結ばれている。この結びは福音書記者マタイによる二次的付加であり、この譬えが一九章三〇節(「ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです」)の説明となるよう加えられたものである、とするのが今日の通説である。更に、この譬えは本来、マタイが示しているように弟子たちに向けられて語られたものではなく、罪人や取税人と積極的に交わるイエスを咎めるパリサイ人達に向けられたものである、と一般的に言われている^①。マタイ二〇章一六節は本当に二次的付加なのだろうか。またこの譬えの聴衆を、本当にマタイは変えてしまったのだろうか。こうした問いに答えることが、この小論の意図である。

一 二〇章一六節の真正性について

この節は確かに一九章三〇節の反復にすぎないように見える。その繰り返しによって、この譬えが一九章三〇節の解説であることが、より一層明瞭になっている。そのように反復したのはイエス自身ではなく、福音書記者である、という主張は、以下の考察に基づいている。(一)、二〇章一六節に類似した言葉が、別の文脈に見出されるといふ事実^②は、この言葉が本来独立して流布していたことを示している。(二)、一六節の *οἷος ἐσούρα* はマタイに特徴的な言い回しである。(三)、一六節の言葉は、譬えの本体の意味内容と合致しない^④。

共観福音書において、階級序列の逆転を教えるイエスの言葉は、マタイ二〇章一六節を含めて四個所に見出される。先ずマタイ一九章三〇節とその直接の平行箇所であるマルコ一〇章三一節。それらは譬えの一部ではない。更にルカ一三章三〇節にも類似の言葉が出てくるが、その文脈は前二者のそれとも、マタイ二〇章一六節のそれとも、全く異なっている。こうした事実から、これらの言葉は元来独立したロギオンであって、マタイは二〇章一六節において、それを譬えに適應させ、付加したものとしなければならないのだろうか。四つのロギオンの原文は次のとおりである。

- (イ) マルコ一〇章三一節 *πολλοὶ δὲ ἐσούραι πᾶροι ἐργατοὶ καὶ (οἱ) ἐργατοὶ πᾶροι*^⑤
- (ロ) マタイ一九章三〇節 *πολλοὶ δὲ ἐσούραι πᾶροι ἐργατοὶ καὶ ἐργατοὶ πᾶροι*
- (ハ) マタイ二〇章一六節 *οἷος ἐσούραι οἱ ἐργατοὶ πᾶροι καὶ οἱ πᾶροι ἐργατοὶ*
- (ニ) ルカ一三章三〇節 *καὶ ἴσοι εἶναι ἰργατοὶ οἱ ἐσούραι πᾶροι, καὶ εἶναι πᾶροι οἱ ἐσούραι ἐργατοὶ*

同じ文脈にある(γ)と(δ)は、定冠詞²以外は全く同じ形である。(γ)と(ε)は、(γ)と(δ)と違って *τοιοῦτοι* を欠き、しかも文章の順序が逆転している、という点で一致している。こうした事実から、ある者たちは、(γ)と(ε)は共通の資料Qに由来していると考え⁹⁾。また別の者たちは、(γ)を構成する九語の内七語が(γ)に見出されることから、マタイ二〇章一六節は、マルコ一〇章三二節とQに属した類似の言葉の合成(*conflation*)とみる¹⁰⁾。いずれの場合も、文章の順序の逆転はQの影響とみなしているわけである。けれども、そうした共通点にもかかわらず、(γ)と(ε)の意味は厳密に言えば異なっている。(ε)の強調点が、将来逆転することになる現在の序列にあるのに対し、(γ)では現在の序列の将来における逆転に力点が置かれている。勿論、(γ)と(ε)の背後に同じ言葉(Q)があったと考えることは可能である。しかし、ひとつの共通の言葉がマルコとマタイの同じ文脈にあり、(γ)と(δ)、他にそれと類似した、しかし異なった二つのロギオンがマタイとルカにそれぞれ見出される、(γ)と(ε)、と考えることも同様に可能である。未来において序列が逆転するというロギオンは、伝承において独立して存在していたかもしれないが、だからと言って、そのようなロギオンをイエスは一度しか語らなかつた、と論ずる必然性はない。むしろイエスは、様々な機会に序列の逆転について語つたという想定の方が、より真実に近いのではないか。類似の真理を語りながら、しかも異なった形をもつ主の言葉が福音書に記されているのは、イエス自身が多少異なった形で、そうしたロギオンを繰り返したためと思われる¹¹⁾。従つて類似した言葉が、様々な文脈に見出せるから、マタイ二〇章一六節は、福音書記者による二次的の反復である、と論ずるのは、いささか性急であらう。

第二の議論はこうである。前述の四個所の中で、マタイ二〇章一六節だけが *οἷος εἰσρατα* という語を含んでいる。しかも *οἷος εἰσρατα* はマタイに特徴的な言い回しである。これらの事実も、この節が二次的付加であることを示している、というのである。確かに *οἷος εἰσρατα* は第一福音書に最も多く繰り返される(二二回——これに対しマルコに

は二回、ルカには三回見出される)。しかしこのように一般的な表現をマタイの占有物(*monopoly*)とし、マタイに帰さなければならぬ必然性はない。またたといそれがマタイの筆によるものであつたとしても、それだからこの節はマタイによる付加だとするのは、いささか短絡的であらう。福音書記者が、受けとつた伝承を自らの文体で書きかえたかもしれない。とすればマタイ的表現の存在、即マタイによる創作ということにはならない。従つて第二の議論は決定的なものではない。

第三の議論には二つの問題が含まれている。第一に、二〇章一六節は譬えの本体(一一一五節)に合致しない、何故なら、もし一六節を別にすれば、譬えは序列の逆転を教えてはならず、むしろ全ての労務者が同じ賃金の支払いを受けたとしているから、という議論がある¹²⁾。確かにエレミヤスが指摘するように、賃金の支払いの順番は、序列の逆転を示唆するものではない。ただ一日中働いた労務者が、夕方しか働かなかつた労務者に対する支払いの場に居合わせているように、そうした支払い順序が逆転されている¹³⁾。それにしても、一六節を除くなら、譬えそれ自体は序列の逆転を少しも示唆していない、という指摘は本当だろうか。一日中働いた労務者たちに見れば、わずかしかなかなかつた者たちと同じ賃金しかもらえなかつたのだから、実際、自分たちは一番ひどい扱いを受けたと思つたのではないか¹⁴⁾。一日中働いた者たちが一番多くの収入を得て当然なのだから、報酬が同じだったのであれば、序列は事実上逆転している、と譬えの聴衆は感じたことであらう。そして自分たちも、自らの功績に比例して報いが与えられることは無いかもしれないと、理解したのではあるまいか。この譬えにおいては、平等それ自体が、実質的に逆転を意味したのである。一六節を視野から外しても、確かに譬えそれ自体の内に逆転が見られるのである。

この問題に関連して、別の意味で序列の逆転を考える者たちもいる。文句をつけた労務者は、報酬を楽しむことができなくなつてしまつたという意味で¹⁵⁾、あるいは、自らを恵みの源泉から切り離してしまつたという意味で、序列が

逆転したというのである。確かに譬えの聴衆は、そうした精神的損失を感知したかもしれないが、だからと言って、そのような逆転こそ、この譬えにおける序列逆転の主たるものであったとは思えない。そうしたポイントは副次的なものである。

第二の問題は、譬えの焦点は、序列の逆転よりむしろ雇い主の気前良さ、つまり神の寛大さにあるのだから、一六節はマタイによる二次的解釈に違いないという議論である。確かに、神の寛大さ^⑮、神が絶対的な主権と自由をもって善を行なわれること、神の主権的な恵みといったことを譬えが語っている事実は、否定し難い。しかし雇い主の内に見られるそうした神の姿(あるいはキリストの姿)は、序列の逆転が語られる背景となっている。これら二つの思想は両立しえないものではなく、譬えの中で、切り離し難く結合している。一方で序列の逆転は、神の寛大さを前提にしている。しかし他方、この譬えは神のそうした寛大さのみを語っていると言うなら、譬えのある部分は意味を失うことになる。たとえば、最後に雇われた労働者に最初に賃金が支払われる、といった文学上の工夫も、意味が少なくなる。一日中働いた労働者の期待や失望、不服申し立て等は、神の寛大さよりも序列の逆転を浮彫りにするのに役立つているのだから、意味を失うことになる。譬え全体が表現しようとしているのは、神の絶対主権に基づく寛大さの故に、将来起こるかもしれない序列の逆転である。二つの思想は不可分に結合しており、また一六節は譬えの内容と不可分に結びついているのである。

以上三つの理由どれをとっても、二〇章一六節の真正性を疑う理由として十分ではない。この節が初めからこの譬えの結びであったことを、疑う決定的な理由はないのである。

二 譬えの本来の聴衆について

親切的な雇い主の譬えが語られた本来の状況は、ルカ一五章に記された「失われた羊」や「失われた銀貨」の譬えのそれと同じである、としばしば主張されている。つまり譬えの聴衆は本来、パリサイ人、律法学者であったと言うのである。^⑯ ヴィアは次のように述べている。イエスがこの譬えを語られた目的は、「自らの罪人たちとの交わりを弁護し、同時に」パリサイ人の「律法主義的な報酬の教理を攻撃することにあつた」^⑰。確かに譬えは、パリサイ人や律法学者を思い起こさせるような要素を含んでいる。人は自らの成しとげた事に応じて、報酬を与えられるべきだという考えは、パリサイ人の報酬思想に合致している。また一日中働いた労働者とわずかな時間しか働かなかつた労働者、といったコントラストは、忍耐強く律法を成就しようとするパリサイ人と、何の良い業もない罪人たち、というコントラストを反映しているように思われる。^⑱ 労働者たちの文句は、パリサイ人たちのつぶやき(例えばルカ一五章二節、一九章七節)を思い起こさせる。このように不満を抱く労働者とパリサイ人の間に、ある種の対応を見ることは可能である。

ところが、次の点を考慮するとき、こうした対応が適切かどうか疑わしくなる。第一に、ミハエリスが指摘するように、文句をつけた労働者も、報酬を受け取っていることである。この点で、労働者たちの姿は、律法学者、パリサイ人より、弟子たちの状況とよく調和している。^⑲ 確かにリンネマンの反論にあるように、譬えのこうした細かい要素をいちいち取り上げて、対応を追求するのは正しくないかもしれない。放蕩息子の譬えに出てくる長男は、パリサイ人律法学者に対応しているが、神に対応している父親は彼を拒絶していない。けれども、放蕩息子の譬えでは、取税

人や罪人に対する態度の違いが焦点になっているのに対し、親切な雇い主の譬えにおいては、報酬の（実質的な）違いが中心ポイントになっていることを、考慮するならば、報酬はどうでも良い細かな点として、片付けてしまうことはできない。やはりミハエリスの主張のように、労務者の姿は、弟子たちのそれによりよく合致する。第二に失われた羊や銀貨、また放蕩息子の譬えでは、取税人や罪人たちは失われた物として表現されているのに対し、この譬えに登場するのは、受ける資格がないのに十分な報酬を受ける者たちである。彼らも罪人たちを表わしていると、とれないこともないが、ルカ一五章の一連の譬えのように明確ではない。むしろ自然にとるなら、最後に来た労務者たちは、弟子たちの集団に後から加わった者たちのことである、と言うべきであろう。この譬えは確かにマタイの文脈によく合致している。この譬えは、パリサイ人に対する警告としてみるよりも、自分たちの犠牲を根拠として大きな報酬を期待する傾向にある弟子たち（一九章二七節）、仲間の間で一番高い地位を要求しやすい弟子たち（二〇章二〇節）に向けられた警告としてみた方が、より大きな効果をもたらすのである。

この譬えの本来の聴衆はパリサイ人であると考えるエレミヤスは、こう論ずる。この譬えは二つのエピソードに分けられる。ひとつは、労務者を雇い、賃金の支払いについて気前の良い指示を与える主人を描く一―八節、第二に、損害を受けた者たちの憤慨について語る九―一五節である。エレミヤスは続けてこう言う。「このように二つの頂点をもった譬えの場合は、すべて、その強調点は第二の頂点にある。」そして第二の頂点から分かることは、この譬えが向けられた対象は、不平を言う労務者に似た者たち、良き音信を批判し、それに反対する人間——たとえばパリサイ人たち——だということである、とエレミヤスは結論する。^⑤確かにこの譬えを二つに分けることは可能であり、そのクライマックスは後半にあると言える。しかし不平を言うのはパリサイ人に限らない。この譬えに描かれた不平は、自分の報酬に失望した者たちの不平であって、積極的に良き音信を批判する者たちの不平ではない。エレミヤスの議論は少しばかり飛躍している。

カドゥは、譬えは異邦人キリスト者の教会加入にまつわる、ユダヤ人キリスト者の不満を扱ったものだ、と主張している。ユダヤ人キリスト者は、「律法の重荷をになわなかった異邦人が、何故われわれと同じ権利を享受するのか」と問う。譬えはそれに答えて、そのように問うのは、異邦人には機会がなかったこと、神の寛大さという事実、彼らも神の恵みが必要としているという現実を、見落しているからだ、としている、というのである。^⑥しかし、リンネマンが言うように、^⑦このような解釈は、『だれも雇ってくれないからです』といった言い訳とか、労務者の報酬が一日分の必要を満たすものでしかないという状況、といった副次的なポイントに基づくものである。こうしたポイントは同時に、弟子たちの集団に後から加わった者たちの直面する状況に、合致している。従って福音書がこの譬えに与えている状況設定を拒む理由はない。

結 び

この譬えは弟子たちではなく、パリサイ人に向けられたものだという議論は、大抵の場合、二〇章一六節の真正性 (authenticity) を拒むことから出発している。しかし、一六節は聴衆を変更するための二次的付加である、とみる理由は十分でないことが、明らかにになった。またこの譬えは弟子たちの状況に十分合致しているのであるから、マタイの文脈——この譬えを、自分たちに特別な報酬を期待する傾向をもつ弟子たちに向けられたものとする——の真正性を拒む理由もないのである。マタイの文脈の中で譬えを解釈していくとき、われわれは最もよくそれを理解することができるのである。

- ⑫ F. Filson, *A Commentary on the Gospel according to St. Matthew* (New York: Harper, 1960), p.213.
- ⑬ A. Plummer, *An Exegetical Commentary on the Gospel according to St. Matthew* (rev. ed., Grand Rapids: Eerdmans, 1953), p.274; Bornkamm, G. Barth and H.J. Held, *Tradition and Interpretation in Matthew* (ET, Philadelphia: Westminster, 1963), p.120, n.2.
- ⑭ Via, *Parables*, p.154.
- ⑮ Dodd, *Parables*, pp.94—95; P.B. Payne, *Metaphor as a Model for Interpretation of the Parables of Jesus with Special Reference to the Parable of the Sower* (Ph.D. dissertation, Cambridge University, 1975), p.249.
- ⑯ 二ノキトノ (Parables, p.158) 余亦思キトノノキノ或譯。
- ⑰ Hill, *Matthew*, p.285; A. von Schlatter, *Der Evangelist Matthäus* (Stuttgart: Calwer Verlag, 1963), p.157.
- ⑱ 110節 | 木根の或譯也。餘譯之ヲ以テ其ノ譯ヲ以テシテ Schlatter, *Matthäus*, p.592; 余亦思。
- ⑲ Linnemann, *Parables*, p.86; Jeremias, *Parables*, p.27.
- ⑳ Via, *Parables*, p.149.
- ㉑ Linnemann, *Parables*, p.87.
- ㉒ W. Michaelis, *Das Gleichnisse Jesu* (Hamburg: Furche Verlag, 1956), p.179.
- ㉓ Linnemann, *Parables*, p.157.
- ㉔ Jeremias, *Parables*, p.27.
- ㉕ A.T. Cadoux, *The Parables of Jesus* (London: James Clark, 1930), p.102. W.F. Albright and C.S. Mann. *Matthew* (Garden City: Doubleday, 1971), p.238.
- ㉖ Linnemann, *Parables*, p.158.

(韓民國福音堂福音堂圖書部 圖書部 福音堂圖書部)